

日本語の助詞ハとガの獲得に対する 機能的アプローチ

東京大学教育学部教育心理学研究室 田 原 俊 司
和光大学人文学部 伊 藤 武 彦

A Functional Approach to the Acquisition of Japanese Particles wa and ga

Shunji TAHARA and Takehiko ITO

Wa and ga are difficult grammatical items to acquire in both first and second languages and there are still parts of unsolved problems in their description in the history of grammatical theories. Our approach is based on the view that wa and ga have grammatical multifunctionality which makes this grammatical issue more complex. In this paper three components of the multifunctionality of wa and ga are proposed: (1) syntactic function, (2) referent-comparison function, and (3) discourse function. The purpose of this study is to clarify the process of the acquisition of each function by using psycholinguistic methods as a first step to discuss the relation among the multiple functions.

助詞ハとガの文法的性格づけおよび用法の区別については、長い間、国語学・日本語学・言語学において論争がおこなわれているのは周知の通りである。ハとガの区別は多くの外国人日本語学習者において獲得が困難であり、初学者に誤用の多いことが指摘されている（鈴木，1978などを参照）。また、日本語を母語とする者にとっても獲得の時期は、かなり遅いことが明らかにされている（近藤，1978；Miyazaki, 1979；秦野，1979；林部，1983など）。日本語児がハとガを使い始める時期は一歳台であるが（大久保，1967；宮原・宮原，1973，1976；前田，1977），初期には助詞の脱落率が高くいわゆる電報体（助詞なし文）が多い。ガは二歳後半で脱落率が大人の水準にまで減少するが、ハの脱落は5歳児でも依然として高い（Miyazaki, 1979）。しかし、ハとガを機能面から弁別して使用が正確におこなわれる時期については不確定であり、本論文の目的の一つは、ハとガの用法について正確な使用が始まり完成する時期を明らかにすることである。

さて、ハとガは第一言語においても第二言語においても獲得困難な文法項目であり、さらには文法理論史の中

でもいまだ未解決な部分が多いといえるが、その背景として、われわれは、ハとガが多重機能性（Multifunctionality）を持つという点を重視し、このような観点からハとガの問題に接近することを試みる。多重機能性とは Karmiloff-Smith (1979) がフランス語児における限定詞の発達を明らかにする際にフランス語の定・不定冠詞に対して用いた概念であり、同じ冠詞が様々な機能を併せ持つことを表したものである。本論文では、ハとガの多重機能性を構成するものとして(1)統語的機能、(2)対象比較的機能、(3)談話的機能の三つを提出する。ハとガの統語的機能では、ハが主題を標示する、すなわち述部との意味的関係を示さず文全体の題目をあらわすのに対し、ガは述部に対して特定の格関係（主格）を明示するという差異がある。対象比較的機能とは同一クラスの他のメンバーとの関係を示すものであり、ハの対照の用法と、ガの総記（排他）の用法（Kuno, 1973 参照）がこれに当たる。最後に、ハによって旧情報をあらわし、ガによって新情報をあらわすという、情報構造に基づく談話的機能上の違いが指摘される。

これら三つの機能でハとガの多重機能性がすべて説明

されるというわけではない。むしろ多重機能を構成する一部であると言った方が正しいかもしれない¹⁾。しかし、三つともハとガの用法として代表的なものであり、本論文では各々の機能の獲得過程を明らかにするところから出発する。実際の言語運用においては、これらの機能は孤立的に機能するのではなく同時に働くこともあるであろう。諸機能の間で相互作用・干渉・競合・共存などの複雑な関係に基づいて実際の表層化や文処理がおこなわれると思われる。このような複雑な言語処理過程をふまえて、本研究ではハとガの多重機能性に対し心理言語学的方法を用いて諸機能の獲得過程を明らかにし、諸機能の関連を検討する第一歩としたい。

1. ハとガの統語的機能

ガが主格を表すのに対し、ハは主題を標示するのであって、格関係を表すのではない。たとえば他動詞を述部とする能動文において NP-ガ (NP は名詞句の略) は動作主を表すが、NP-ハ は必ずしも動作主であるとは限らない。たとえば、(3)の文の NP は動作主としか解釈され

-
- (1) a 太郎は料理を全部食べなければなりません。
 b 太郎は水槽にエサを入れました。
 (2) 魚は食べました。
 (3) 魚が食べました。
-

得ないのに対し、(2)の文の NP は、先行文脈が(1)a であるか(1)b であるかによって動作主にも被動作主にもなり得る。従って、(2)の文のハに格関係を示す機能はないと言える。このような文を処理する場合、格関係を判断する手がかりとなるのは、意味的な手がかりであろう。しかし(2)のような文が単独であらわれた場合、動作主と解釈されやすいのも事実である。このような場合 NP-ハや NP-ガが動作主として聞き手に解釈される確率を、ハあるいはガの「動作主性 (agentivity)」と呼ぶことにする。

伊藤 (1982, 1985) は、ハとガの動作主性にどのような違いがあるのかを調べる実験をおこなった。実験は、日本語母語話者、日・英二言語併用者、英・日二言語併用者 (アメリカ人日本語教師)、アメリカ人日本語学習者に対し、二つの名詞句と一つの動詞から成る「単文」を聞かせ、どちらの名詞が動作主であるかを判断させ動作によって示させるという課題 (act-out method) を用いた。刺激文は Table 1 に示すように、助詞の組み合わせ (6 種類) × 語順 (3 種類) × 名詞の意味の組み合わせ (3 種類) からなる 54 の文型を用いた。助詞の組み合わせは、一方の NP にハが付き他方の NP に助詞のな

い文型 ([は/Ø] [Ø/は]), 一方の NP にガが付き他方の NP に助詞のない文型 ([が/Ø] [Ø/が]), 一方の NP にガが付き他方の NP にハが付いた文型 ([が/は] [は/が]) の 6 種類である。語順は二つの名詞 (N) と動詞 (V) の語順で、NVN, VNN, NNV の 3 種類である。また、名詞の意味の組み合わせは、NP が生物 (A) か、無生物 (I) かで、NP の両方が生物である場合 (AA), 第一名詞 (NP₁) が生物であるのに対して第二名詞 (NP₂) が無生物である場合 (AI), NP₁ が無生物で NP₂ が生物である場合 (IA) の三種類である。

Fig. 1 は [が/Ø] [Ø/が] 文型で NP-ガを、Fig. 2 は [は/Ø] [Ø/は] 文型で NP-ハを、Fig. 3 は [が/は] [は/が] 文型で NP-ガを動作主とした割合を群別に示したものである。

Fig. 1 より、一方の NP にガが付いた単文で、ガの動作主性がいちばん高かったのは日本語母語話者群で、いちばん低かったのは日本語学習者群であり、二言語併用者はその中間であることが確認される。これに対して、一方の NP のみにハが付いた文型でのハの動作主性は Fig. 2 に示すように全群高率であるが、群間差があまりないことがわかる。Table 2 は意味方略の使用率²⁾を示したものであるが、日本語母語話者群が他の群と違う点として、文中に NP-ガ がある時には名詞句が生物か無生物かという意味的な手がかりに頼らず、助詞ガの手がかり (助詞方略) に基づいて文処理をおこなっているのに対して、NP-ハ では全群で意味方略がかなり用いられていることが認められよう。一方の NP にガ、他方の NP をハが付いた文型でガの動作主性が最も高いのは、Fig. 3 に示すように日本語母語話者群で、最も低いのは日本語学習者群であり、日本語学習群の場合には、むしろハの動作主性の方が強い。これは、いわゆる所動詞文³⁾ (三上, 1955) (e.g. 私ハ日本語ガ話せる) の場合に、ガが目的格の働きをするが、この構文からの誤った類推による一般化の結果によるものかもしれない。

以上の結果により、日本人母語話者は NP-ガ に対し非文法的要因に左右されず、ガが動作主の格を標示するという文法性に基いた反応を典型的におこなうのに対して、NP-ハでは意味的な手がかりにかなり依存して文を解釈していることが明らかである。このような弁別的反応は、ガが主格をあらわし、ハは主題をあらわすという日本語文法に則ったものであるといえる。他の三群、とりわけ日本語学習者群ではこのような区別が明確ではない。このことは、主格と主題の区別を言語運用レベルで完全に行っていないことを示しているといえよう。主題と主格の双方を標示する標識を対に持つ言語は日本語

Table 1 刺激文のタイプ

語 順	助 詞	意 味	文 型	文 例
NNV	は/θ	A A (1)	AハA V	鹿ハ 馬箱 たたいた
		A I (2)	AハI V	鹿ハ 馬箱 たたいた
		I A (3)	IハA V	箱ハ 鹿 たたいた
	θ/は	A A (4)	A AハV	鹿 馬ハ たたいた
		A I (5)	A IハV	鹿 馬箱ハ たたいた
		I A (6)	I AハV	箱 鹿ハ たたいた
NVN	は/θ	A A (7)	AハV A	鹿ハ たたいた 馬箱
		A I (8)	AハV I	鹿ハ たたいた 鹿
		I A (9)	IハV A	箱ハ たたいた 鹿
	θ/は	A A (10)	A V Aハ	鹿 たたいた 馬ハ
		A I (11)	A V Iハ	鹿 たたいた 箱ハ
		I A (12)	I V Aハ	箱 たたいた 鹿ハ
VNN	は/θ	A A (13)	V AハA	たたいた 鹿ハ 馬箱
		A I (14)	V AハI	たたいた 鹿ハ 鹿
		I A (15)	V IハA	たたいた 箱ハ 鹿
	θ/は	A A (16)	V A Aハ	たたいた 鹿 馬ハ
		A I (17)	V A Iハ	たたいた 鹿箱ハ
		I A (18)	V I Aハ	たたいた 箱ハ 鹿ハ
NNV	が/θ	A A (19)	AガA V	鹿ガ 馬箱 たたいた
		A I (20)	AガI V	鹿ガ 馬箱 たたいた
		I A (21)	IガA V	箱ガ 鹿 たたいた
	θ/が	A A (22)	A AガV	鹿 馬ガ たたいた
		A I (23)	A IガV	鹿 馬箱ガ たたいた
		I A (24)	I AガV	箱 鹿ガ たたいた
NVN	が/θ	A A (25)	AガV A	鹿ガ たたいた 馬箱
		A I (26)	AガV I	鹿ガ たたいた 鹿
		I A (27)	IガV A	箱ガ たたいた 鹿
	θ/が	A A (28)	A V Aガ	鹿 たたいた 馬ガ
		A I (29)	A V Iガ	鹿 たたいた 箱ガ
		I A (30)	I V Aガ	箱 たたいた 鹿ガ
VNN	が/θ	A A (31)	V AガA	たたいた 鹿ガ 馬箱
		A I (32)	V AガI	たたいた 鹿ガ 鹿
		I A (33)	V IガA	たたいた 箱ガ 鹿
	θ/が	A A (34)	V A Aガ	たたいた 鹿 馬ガ
		A I (35)	V A Iガ	たたいた 鹿箱ガ
		I A (36)	V I Aガ	たたいた 箱ガ 鹿ガ
NNV	は/が	A A (37)	AハAガV	鹿ハ 馬ガ たたいた
		A I (38)	AハIガV	鹿ハ 馬箱ガ たたいた
		I A (39)	IハAガV	箱ハ 鹿ガ たたいた
	が/は	A A (40)	AガAハV	鹿ガ 馬ハ たたいた
		A I (41)	AガIハV	鹿ガ 馬箱ハ たたいた
		I A (42)	IガAハV	箱ガ 鹿ハ たたいた
NVN	は/が	A A (43)	AハV Aガ	鹿ハ たたいた 馬ガ
		A I (44)	AハV Iガ	鹿ハ たたいた 箱ガ
		I A (45)	IハV Aガ	箱ハ たたいた 鹿ガ
	が/は	A A (46)	AガV Aハ	鹿ガ たたいた 馬ハ
		A I (47)	AガV Iハ	鹿ガ たたいた 箱ハ
		I A (48)	AガV Aハ	箱ガ たたいた 鹿ハ
VNN	は/が	A A (49)	V AハAガ	たたいた 鹿ハ 馬ガ
		A I (50)	V AハIガ	たたいた 鹿ハ 箱ガ
		I A (51)	V IハAガ	たたいた 箱ハ 鹿ガ
	が/は	A A (52)	V AガAハ	たたいた 鹿ガ 馬ハ
		A I (53)	V AガIハ	たたいた 鹿ガ 箱ハ
		I A (54)	V IガAハ	たたいた 箱ガ 鹿ハ

N : 名詞, V : 動詞, A : 生物名詞, I : 無生物名詞, θ : は助詞を付けないことを示す。

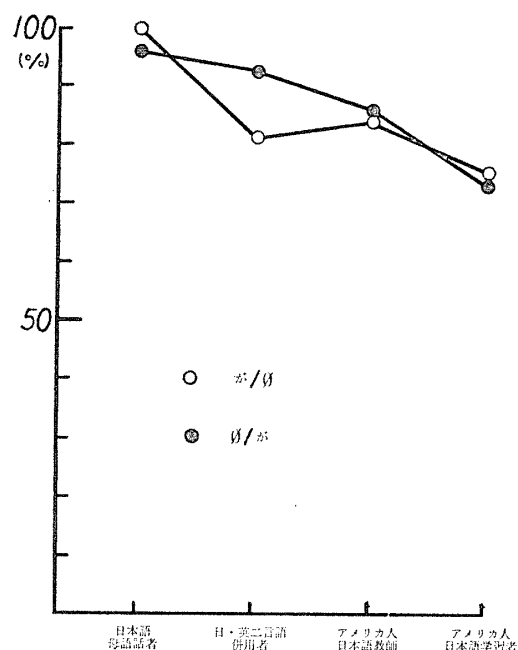


Fig. 1 [が/ø] [ø/が] 文型で NP-ガ を動作主とした割合 (伊藤, 1982)

と朝鮮語しかなく (Li and Thompson, 1976), そのシステムが複雑なこと, 第一言語 (英語) において対応する文法的装置が存在しないこと等が, 彼らのできなさの原因であると思われる。全群でハの動作主性が高かったことは, ハがガ格を代行することが最も多い (三上, 1960) という確率的分布を反映した文処理であるといえよう。

伊藤・田原 (1985) は以上のようなハとガの統語的機能の区別が発達的にどのように獲得されていくのかを調べる実験を行なった。実験は日本語を母語とする 4, 5, 6, 8, 10, 12, 14 歳児群, 及び大人の 8 群に対して, 伊藤 (1982, 1985) と同じように, 二つの名詞句と一つの動詞からなる単文を聞かせ, どちらの名詞が動作主であるか判断させ動作によって示させる方法を用いた。刺激文は, 二つの名詞 (N) と動詞 (V) の語順として NNV 語順のみで, 助詞の組み合わせ (6 種類) × 名詞の意味の組み合わせ (3 種類) の 18 文型である。これは,

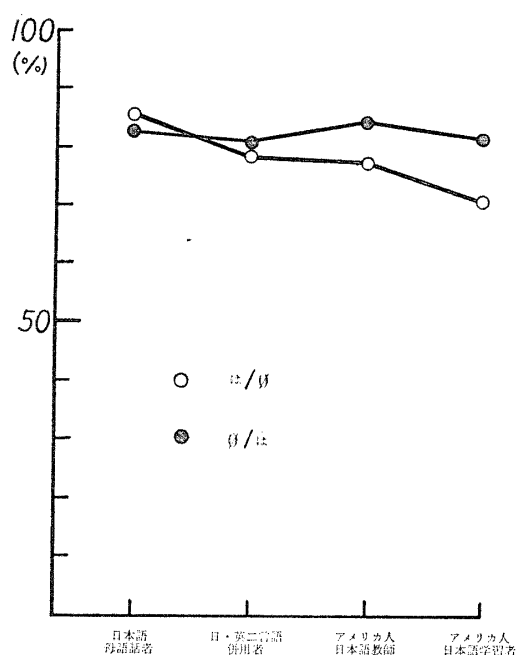


Fig. 2 [は/ø] [ø/は] 文型で NP-ハ を動作主とした割合 (伊藤, 1982)

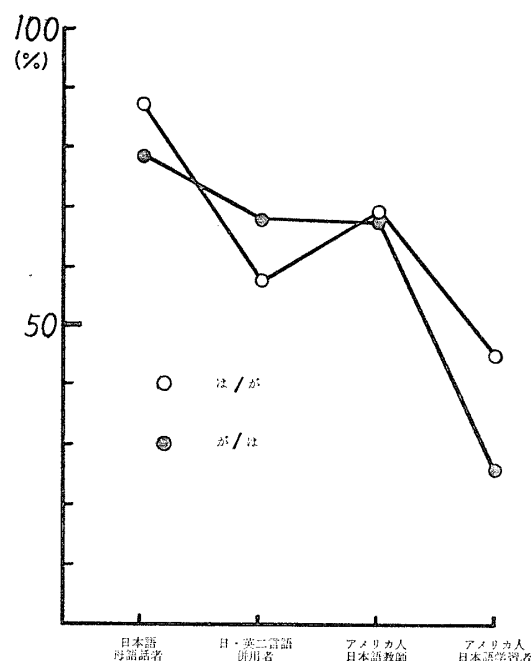


Fig. 3 [は/が] [が/は] 文型で NP-ガ を動作主とした割合 (伊藤, 1982)

Table 2 意味方略の使用率 (%)⁴⁾

(伊藤, 1982)

被 験 者 群	[ガ/ø]	[ø/ガ]	[ハ/ø]	[ø/ハ]	[ガ/ハ]	[ハ/ガ]	平 均
日 本 語 母 語 話 者	0	13	38	42	25	25	24
日・英二言語併用者	42	25	34	42	41	42	38
アメリカ人日本語教師	20	20	40	33	53	33	33
アメリカ人日本語学習者	8	17	29	30	46	13	13
平 均	18	19	35	37	42	28	30

Table 1 の中の 1～6, 19～24, 37～42 の文型に相当する。

結果として、大人では一方の名詞句にガが付いた NP-ガ を動作主と判断する動作主性は84.2%であるのに対して、一方の名詞句にハが付いた NP-ハ を動作主とする確率は78.4%であり、ガの動作主がハの動作主性より高いことが確認された。この傾向は刺激文型の相違により伊藤 (1982, 1985) の結果と単純な比較をすることはできないが、両研究において一致している。発達のみに

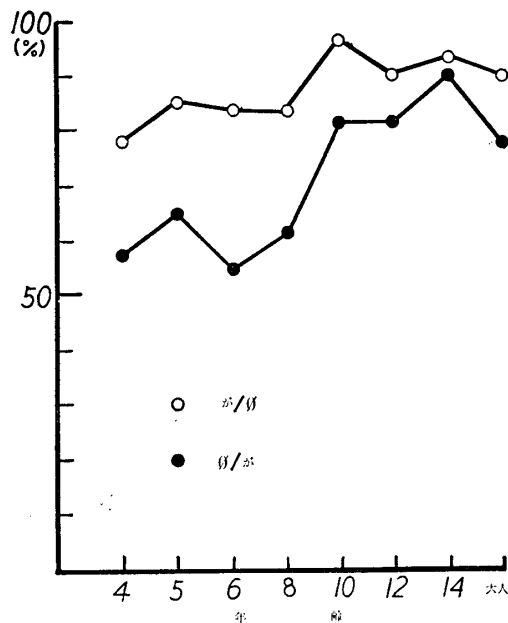


Fig. 4 [が/ø] [ø/が] 文型で NP-ガ を動作主とした割合

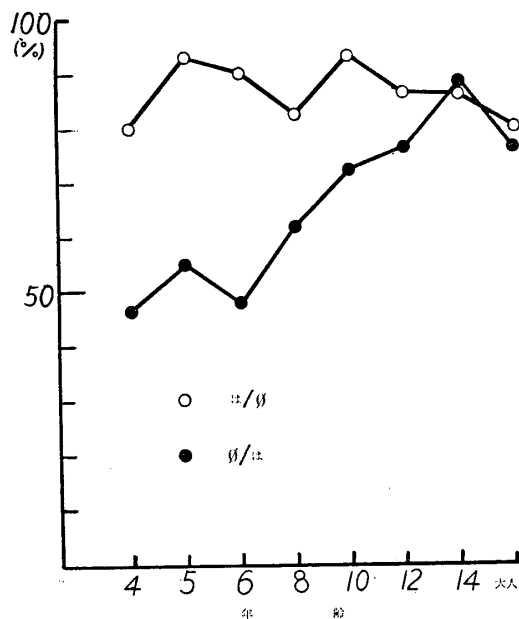


Fig. 5 [は/ø] [ø/は] 文型で NP-ハ を動作主とした割合

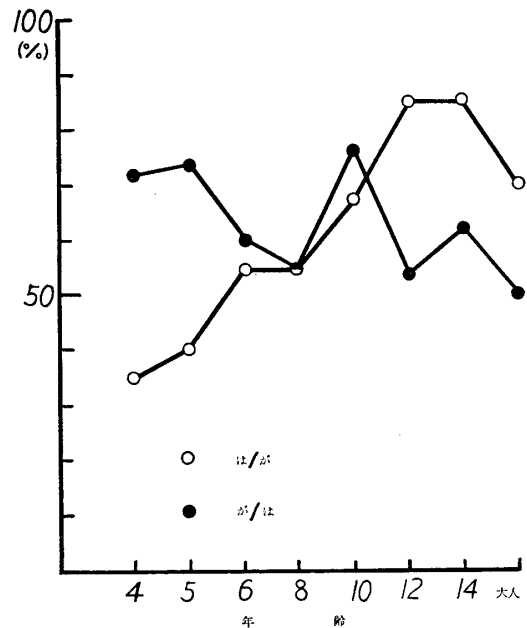


Fig. 6 [は/が] [が/は] 文型で NP-ガ を動作主とした割合

ると、Fig. 4, 5, 6 から明らかなように、第一名詞にガ、又はハが付いた [が/ø] [は/ø] 文型で NP-ガ(ハ) が動作主として判断される動作主性は年齢間であまり差がなく、4歳児でもほぼ大人の選択率に達しているのに対して、第二名詞にガ、又はハが付いた [ø/が] [ø/は] 文型で NP-ガ(ハ) の動作主性が大人の高さに達するのは10～12歳頃になってからである。また、一方のNPにガ、他方のNPにハが付いた [が/は] [は/が] 文型では、[が/は] 文型で年齢間の差があまりないのに対して、[は/が] 文型では [ø/が] [ø/は] 文型と同様に、ガの選択率は10歳頃にはほぼ大人の高さに達している。この [が/は] [は/が] 文型において、4, 5歳児群は [が/は] ではガが付いた第一名詞を動作主として選ぶ率が高いのに対して、[は/が] ではハが付いた第一名詞を動作主として選ぶ率が高いことから、低年齢児群では [が/は] [は/が] 文型で第一名詞を動作主とする傾向が強いことが示唆される。

以上、伊藤 (1982, 1985), 伊藤・田原 (1985) より、日本語母語話者の成人では主格と主題の区別は心理レベルでおこなわれていること、すなわちハとガの統語的機能の区別に心理的実在性があることが示されるとともに、発達的には10～12歳でほぼ成人の水準に達することが明らかになったといえよう。

2. ハとガの対象比較的機能

ハには主題の他に対照の用法が、ガには主格の中立叙

述の他に総記（または排他）の用法がある。対照、総記の用法はそれぞれ、ハ、ガによって言及された事象と言及されなかった事象の一部又は全体を比較するという共通の機能（対象比較的功能）を持つ。

対照用法のハとは、主題のハが題目（topic）を提示して名詞句を取り立てる用法があったのに対して、二つ以上の物を比較対照する時に用いる用法である。

(2)-1 河島君は学生ですが、増山君はサラリーマンです
が対照用法の例文としてあげられる。

しかし、対照用法では一方の名詞句及び述部を文脈により省略することが可能で、省略すると、文は形式上、主題と対照の用法で全く同一の文になる。例えば

(2)-2 河島はその新聞を読んだ
という文中の助詞ハは、主題、対照の用法としてそれぞれ解釈することが可能で、主題として解釈すれば

(2)-3 河島についていえば、その新聞を読んだ
となるが、対照として解釈すれば、例えば

(2)-4 増山がその新聞を読んでいないのに対して、河島はその新聞を読んだ
となる。

総記用法のガとは、中立叙述のガが事態を単に述べる用法であったのに対して、ある集合の中で「特定のもののだけが」ということを表す時に用いる用法である。ガを含む文も、文脈により中立叙述と総記、それぞれそのどちらの用法でも解釈することが可能である。例えば

(2)-5 河島がやってくる
という文に対して、文中のガを中立叙述として解釈すれば、単に河島がこちらに向かっているという事態を表明したものであるのに対して、総記として解釈すれば

(2)-6 他にもない河島だけがやってくる
となる。

田原（1985）は、このような対照、総記の用法が、いつ頃より主題、中立叙述の用法と区別して理解されるようになるのかを調べる実験を行なった。手続きは幼児か

ら成人までの被験者に、実験Ⅰでは Table 3 に示す a, b の文型が Fig. 7, 8（左はしの子を太郎と説明）と、実験Ⅱでは a, c に示す文型が Fig. 9, 10（太郎の顔の各部位で、髪、まゆ、歯、目であると説明）と、実験Ⅲでは d, e に示す文型が Fig. 7, 8 と合致しているかどうか判断させるものであった。このとき、被験者が Table 3 に示す各文型のハ、ガを主題、中立叙述と判断すれば、いずれの絵カードに対しても刺激文と絵カードの内容とが合致していると答えることが予想される。しかし、実験Ⅰの X と Y, 実験Ⅱの Y と AdjP, 実験Ⅲの X と AdjP との間の助詞ハ、ガを対照、総記と判断すれば、Fig. 7, 9 では刺激文と絵の内容とが合致していると答えるのに対して、Fig. 8, 10 では絵の内容と刺激文とが合致していないと答えることが予想される。例えば Fig. 8（全員歯が黒い）のもとで、実験Ⅰの b 文型（太郎が歯が黒い）を聞かせた場合、太郎と歯の間の助詞ガを中立叙述と判断すれば合致していると答えるであろうし、総記としてとらえれば合致していないと答える

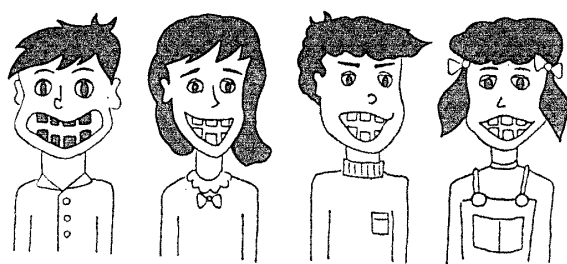


Fig. 7 実験Ⅰ及びⅢで使用された絵カード

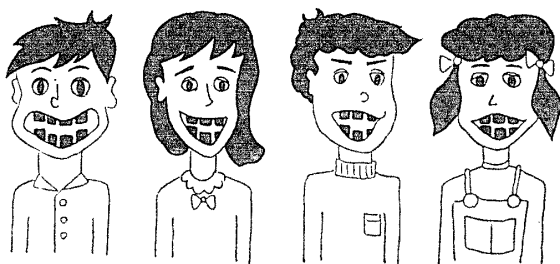


Fig. 8 実験Ⅰ及びⅢで使用された絵カード

Table 3 刺激文のタイプ⁵⁾

（田原，1985）

実験	文型番号	文のタイプ	文例
Ⅰ	a	X <u>は</u> Y が AdjP	太郎 <u>は</u> 歯が黒い
	b	X <u>が</u> Y が AdjP	太郎 <u>が</u> 歯が黒い
Ⅱ	a	X は Y <u>が</u> AdjP	太郎は歯 <u>が</u> 黒い
	c	X は Y <u>は</u> AdjP	太郎は歯 <u>は</u> 黒い
Ⅲ	d	Y は X <u>は</u> AdjP	歯は太郎 <u>は</u> 黒い
	e	Y は X <u>が</u> AdjP	歯は太郎 <u>が</u> 黒い



Fig. 9 実験Ⅱで使用された絵カード



Fig. 10 実験Ⅱで使用された絵カード

であろう。

この実験により、以下のことが明らかになった。第一に、実験Ⅰの文型 a, b で、X と Y との間の助詞ハ、ガは幼児～小学校3年生では、それぞれ主題、中立叙述としてしか判断されない。これらの文型でガを総記であると判断しうようになるのは小学校5年生以降である。しかし、ハは小学校5年生以降でも主題としてしか判断されない。

第二に、実験Ⅱの文型 a, c で、Y と AdjP との間の助詞ハ、ガは幼児～小学生では、それぞれ主題、中立叙述としてしか判断されない。これらの文型で、ハを対照、ガを総記であると判断しうようになるのは中学生以降である。

第三に、実験Ⅲの文型 d, e で、X と AdjP との間の助詞ハ、ガをそれぞれ対照、総記と判断することは、5歳児においてすでに可能である。

以上の結果から以下のことが示唆される。まず、ハとガの対照、総記の用法の理解がはじまるのはかなり早い。しかし、ハとガを対照、総記と語順に左右されず判断しうようになると考えられるのは小学校5年生からであり、その完成は中学生以降である。次に、非規準的な語

順 (d, e 型の文) で対照、総記の理解が促進されるということは、対照と総記が非常に強制的 (有標的) な用法であるということを示唆するものである。さらに、二番目の示唆と関連して、対照、総記はハ、ガのみでは標示されない場合があり、語順などを利用して対照、総記を表すことが示唆される。

3. ハとガの談話的機能

ハが主題をあらわすことを談話の水準でとらえると、ハは旧情報を表す時に用いられる。これに対してガは新情報を導入する時に用いられる。

新旧情報の定義は言語学者によって様々であるが、ここでは Chafe (1976) を参考にして、旧情報は聞き手の意識に存在していると話し手に仮定されている情報、新情報は発話の時点で聞き手の意識に存在しないと話し手に仮定されている情報、と規定する。この規定に従えば、たとえ場面から自明なモノであっても、また、先行文脈の中ですでに言及されているモノ (既出のモノ) であっても、話し手が、聞き手の意識の中にそのモノがまだ導入されていないと判断すれば新情報となる。しかし、既出と旧情報が区別されねばならないとしても、既出の回数が多ければ多いほど、話し手はその既出のモノを旧情報として扱いやすくなることが予想される。

田原・伊藤 (1985) は、物語を伝達する課題において先行文脈に基づくハとガの談話的機能による発話がいつ頃出現し、どのような習得過程を経て完成するのかを調べる実験をおこなった。実験は Fig. 11 に示す4枚の絵カード a, b, c, d のように、a, b ではそれぞれ異なる動物が個々に何らかの行為をし、c では a, b で述べられた動物の片方が他方の動物に何らかの行為をし、

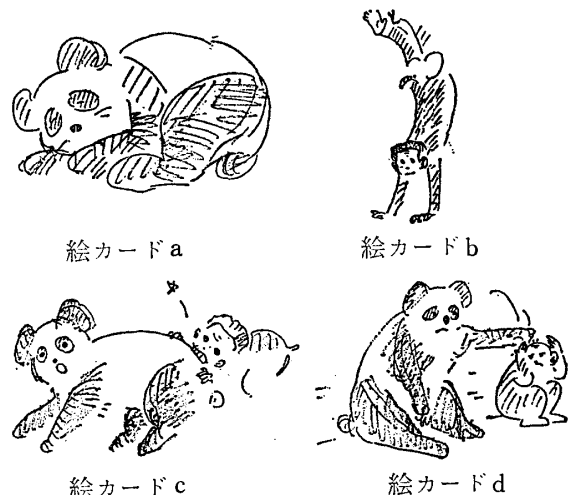


Fig. 11 課題で使用された絵カードの一例

dではcで行為を受けた動物が何らかの行為をするというように設定された4枚一組の絵カードからなる物語の内容を、この絵カードが見えない人形に伝達するという課題である(従って、a, bの動物は初出であるのに対して、c, dの動物は既出となる)。

Fig. 12 は初出の被指示物(動物)を、Fig. 13 は既

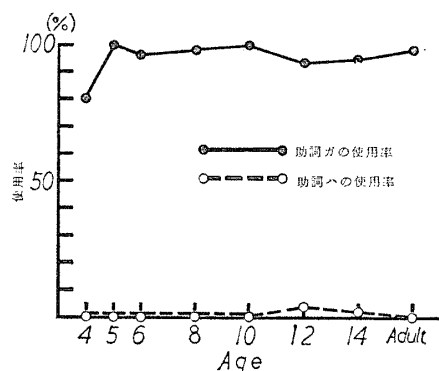


Fig. 12 初出の被指示物の言及に使用される助詞「は」, 「が」の使用率

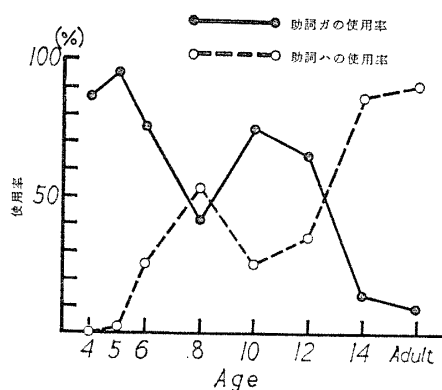


Fig. 13 既出の被指示物の言及に使用される助詞「は」, 「が」の使用率

Table 4 課題における助詞の出現パターンとその使用率 (%)

(田原・伊藤, 1985より)

a b c d	4	5	6	8	10	12	14	成人/ (age)
が が が が (も)	60	90	57	23	63	47	7	0 (3)
が が が は (も)	0	3	20	27	23	33	7	18 (3)
が が は が	0	0	3	7	0	3	0	0
が が は は (も)	0	0	13	33	13	13	83	80 (13) (7) (2)
その他	40	7	7	10	0	3	3	2

出の被指示物(動物)を言及するとき使用される助詞「は」, 「が」の使用率の各年齢群での平均である。また Table 4は、a, b, c, dの各被指示物(動物)に、それぞれどのような助詞を用いたか、そのパターンとその使用率を示したものである。

以上の結果として次のようなことが明らかになってくる。第一に、「は」と「が」の談話的機能の出現・完成の段階として三つの段階を設定することができる。第1の段階は、談話的機能に基づいて「は」と「が」を使い分けることのできない、「は」と「が」の談話的機能の前獲得期である。4, 5歳児までが、ほぼこの段階に相当し、この段階の被験者は物語の文脈とは無関係に「が」のみを使用した。第2の段階は、「は」と「が」の談話的機能の獲得期で、先行文脈に既出のモノに対して「は」を用いはじめるのだが、それが一貫していない段階である。6~12歳が、ほぼこの段階に相当する。第3の段階は、「は」, 「が」の談話的機能の完成期で、既出のモノに対し「は」を、はじめて言及されるモノ(初出のモノ)に対して「が」を組織的に区別して使用する段階である。14歳以降がこの段階に相当する。

第二に、第2段階の特徴として、既出のモノに対する「は」の使用は年齢の増加に従って単調に増えていくのではなく、10~12歳の頃に一時的に減少するという、いわば発達の“後退”現象を示す。

第三に、「既出」という文脈指示上の概念と「旧情報」という情報構造上の概念が密接な関係を持ちながらも、同一のものとして扱ってはならないということはすでに指摘したが、この実験における成人のデータは、これを支持するものであった。すなわち、成人においても物語を伝達する課題において、Table 3に示すように、三枚目のカード(c)に「が」を用い既出のモノにいつも「は」が使用されるとは限らなかったという結果は、既出と旧情報とを区別する必要があることを裏付けるものである。しかし、4枚目の絵カード(d)の被指示物(動物)を言及するとき「は」のみで「が」が使用されないことから、既出の回数の少ないモノに対しては「が」を、既出の回数の多いモノに対しては「は」を用いるという関係も同時に指摘することができる。これは、文脈上「既出」の対象物であっても、被験者である話者は「既出」の対象物の回数などにより、聞き手の意識にその対象物が導入されたかどうかで判断を下すという新旧情報に基づいて、談話機能上の「は」, 「が」を使い分けていることを示すものであると考えられる。従って、「は」と「が」の談話的機能を説明するためには、「初出・既出」という文脈指示上の概念でなく、「新・旧情報」という情報構造上の概念によるべきであるということが示唆される。

ま と め

本論文では、ハとガの多重機能のうち代表的なものとして、統語的機能（主題と主格）、対象比較的機能（対照と総記）、談話的機能（旧情報と新情報）の三つを抽出し、それらの区別とその獲得の問題について紹介した。これら三つの機能は文法的に相互に関連しており（例えば、主題と旧情報との関係）、現実の言語運用においても機能間の相互作用が生じていると考えられる。本論文では対照比較的機能が獲得途上である時期と談話的機能が獲得されつつある時期とが発達的に重なっており、その間に談話的機能においては一時的な発達の“後退”現象——正反応の見かけ上の減少——がみられる。諸機能は個別的・孤立的に獲得されるのではなく、相互に関連しあい、統合されていくことが示唆される。

本論文では結論として、ハとガの諸機能が完成する時期を中学生以降としている。これは英語の冠詞（Maratsos, 1976; Warden, 1976）やフランス語の限定詞（Karmiloff-Smith, 1979）が9歳頃に獲得されるとする研究と対比してみると、より遅い時期である。単に実験課題の複雑さや獲得の基準の高低の問題なのか、あるいは日本語特有の獲得困難な問題としてのハとガの多重機能性の複雑さの反映であるかという判断は今後の研究に待つべきであろう。

（指導教官 芝 祐順教授）

注

- 1) 例えば、ある種の動詞に対してガは目的格を標示するという機能を持つ（久野1973参照）
- 2) 意味方略とは、名詞が生物か無生物かという意味的な手がかりに基づいて動作主を判断する方略である。このとき、助詞は判断の手がかりとして利用されない（助詞を判断の手がかりとして利用する方略を助詞方略と呼ぶ）。一方が無生物である AI, IA 文で、無生物名詞に助詞ガ（[は/0] [0/は] 文型では助詞ハ）が付いている文型では、この意味方略と助詞方略が競合（competition）する。例えば「箱が鹿なめた」という文で、助詞方略を用いれば無生物名詞である箱を動作主とするのに対して、意味方略を用いれば、箱という無生物名詞が鹿をなめるのは意味的に不自然であるので鹿を動作主として判断することになる。Table 2 は以上のような AI, IA 文で、無生物名詞にガ（[は/0] [0/は] ではハ）が付いている文型での意味方略の使用率を反映したものである。
- 3) 所動詞とは三上の用語であり、「見える」「聞こえる」「要る」「できる」「読める」「飲める」のような「受け身を作らずまた命令法が不自然な動詞」（三上, 1975）である。所動詞文中のガは主格でなく目的格を標示する。久野(1973)は「目的格を表わす『ガ』」としてまとめているので参照のこと。
- 4) 算出方法については伊藤（1985）参照。

- 5) AdjP とは形容詞述部。Xは AdjP の直接指示する対象。XはYを含むより大きな集合であるが、AdjP の直接指示する対象ではない。例えば「太郎は歯が黒い」の直接指示する対象は歯であり、太郎ではない。従って太郎はXで、歯はYとなる。下線部はストレスを示すのではなく、それぞれの実験で比較される助詞を示している。

参考文献

- Chafe, W. L. 1976 Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of views. In C. N. Li (Ed.), *Subject and Topic*. Academic Press. 25-56.
- 秦野悦子 1979 子どもにおける助詞“は”“が”の獲得の研究 教育心理学研究, 27, 160-168.
- 林部英雄 1983 文における新-旧情報の弁別に関する発達の研究 心理学研究, 54, 135-138.
- 伊藤武彦 1982 日本語のハとガの動作主性 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 24-25.
- Ito, T. 1985 Universal and particular in sentence processing strategies in monolinguals, bilinguals, and second language learners: a cross-linguistic study. In Bates, E. and MacWhinney, B. (Eds.), *Cross-linguistic Studies of Language Processing*. Cambridge University Press. (In preparation).
- Ito, T. and Tahara, S. 1985 A psycholinguistic approach to the acquisition of multifunctionality in Japanese particle wa and ga. *Descriptive and Applied Linguistics*, 18, 121-131.
- 伊藤武彦・田原俊司 1985 ハとガの動作主性の発達 第9回 I C U 幼児言語学研究会発表資料集。
- Karmiloff-Smith, A. 1979 *A functional approach to child language: a study of determiners and reference*. Cambridge University Press.
- 近藤一政 1978 助詞ガとハの使い分けの発達 東京大学教育心理学科卒業論文（未公開）。
- 久野 暲 1973 日本文法研究 大修館書店。
- Kuno, S. 1973 *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge MA: The MIT Press.
- Li, C. N. and Thompson, S. A. 1976 Subject and topic: a new typology of language. In Li, C. N. (Ed.) *Subject and topic*. Academic Press.
- Maratsos, M. P. 1976 *The use of definite and indefinite reference in young children: an experimental study of semantic acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 三上 章 1955 現代語法新説 刀江書院（くろしお出版）。
- 三上 章 1960 象は鼻が長い くろしお出版。
- 三上 章 1975 主格、主題、主語 三上章論文集, 51-61, くろしお出版。
- 宮原英種・宮原和子 1976 Language development in a young Japanese child: mainly on the acquisition of particles. 福岡教育大学紀要（教職科編）, 26, 91-97.
- 宮原和子・宮原英種 1973 幼児における文法発達の諸相 日本心理学会第37回大会発表論文集, 698-699.
- Miyazaki, M. 1979 The acquisition of the particles *wa* and *ga* in Japanese: a comparative study of L1 acquisition and L2 acquisition. Unpublished master's thesis. University of Southern California.
- 大久保愛 1967 幼児言語の発達 東京堂。
- 鈴木 忍 1978 文法 I: 助詞の諸問題 1 国際交流基金, 凡人社。
- 田原俊司 1978 助詞ハ・ガの対象比較的機能の獲得 日本教育

心理学会第27回総会発表論文集, 240-241。

田原俊司・伊藤武彦 1985 助詞 ハとガ の談話機能の発達 心理学研究, **56**, 208-214.

Warden, D. A. 1976 The influence of context on children's use of identifying expressions and references. *British Journal of Psychology*, **67**, 101-112.

付記 本論文は Ito and Tahara (1985) 及びその後に行なわれた実験の知見に基づいて構成されたものである。論文をまとめるに際して、芝祐順教授の御指導をいただきました。記して感謝の意を表します。